

# 「人間教育」を培うもの

— 伝統文化教育への期待 —

## Cultivating the Education for Human Growth

— Expectations for traditional cultures in education —

奈良学園大学人間教育学部

渡邊 規矩郎

WATANABE Kikuro

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

**キーワード：**先哲・先賢に学ぶ，師承の学，師道，ムラを興す力，伝統文化の開展

**Abstract：** The core of national education is traditional culture, and moreover, it must be based on history, which is regarded most important. This paper is focusing on national history. After defeat in the war, the occupied forces excluded education of national history, moral training, and traditional culture because of the policy on forcing to weaken Japanese structure. The difference between humans and animals depends on whether they form their characters, or not. History leads to broaden human minds freely and eternally, and so does education. Therefore, 'the education for human growth' should create free individuals. Characters are needed in not objectivity but subjectivity for education. This is why traditional cultures are required in education, and the core of the education is to deepen philosophers of the past. Attitudes of philosophers toward academics relate with 'shi-sei' which signifies to stress the way of professors, respect them, and ask them faithfully. The present writer hopes that traditional cultures in education restore the inquiring mind.

**Keyword：** deepening philosophers of the past, arts transmitted from one's professor, duties and responsibilities of a professor, power to create 'villages', development of traditional cultures

### 1. 人として日本に生まれた厳粛な事実

われわれは，人間として，しかも日本人として，この日本に生まれてきた。他の生物としては生まれてこなかった。そして他の国には生まれてこなかった。さらに，それぞれの郷土のそれぞれの家の父母から生まれてきたわけである。そうしたわれわれの存在は，当然のことのように思いがちだが，よくよく考えてみると不思議なことである。たまたまの偶然と思う一方で，説明しがたい縁を感じる。目に見えないハイパーパワー，自然の摂理，天の配剤としかいいようがないものを感じないわけにはいかない。

明治維新の最も偉大な指導者である吉田松陰（1830～1859）は30歳の若さで安政の大獄の犠牲となる。その松陰は22歳の時，藩主の毛利敬親に従って江戸へ遊学し，山鹿素水，佐久間象山らに学び，さらに東北遊学の旅に出て，水戸で会沢正志斎，豊田天功らに会った。会沢正志斎といえば『新論』を著した当時の水戸を代表する大学者である。約1ヵ月ばかり滞在して，水戸光圀（義公）以来の水戸の学風にふれて驚嘆し，「身，皇国に生まれて皇国の皇国たる所以を知らず，何を以て天地に立たむ」との言葉を叫ぶ。今まで私は，日本に生まれているのだから，日本人だと思っていたが，水戸に来て学んでみて，私は今まで日本という国家の本

質を全然理解していなかったことがわかった。日本の本質を知らないで、どうしてこの天地の間に平気な顔をして立っていることができるのか。私はもはや真の日本人とはいえない。これでは無用の人間にすぎない。こう気づき自分に恥じ入るのであった。

そこで、松陰は何をしたかという、早速、六国史、すなわち『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『文徳実録』『三代実録』と続くわが国の正史を読破していく。神代からの日本歴史を学ぶ中からわが国の成り立ちや本質を知るのである。

吉田松陰は、6歳の時に山鹿流兵学師範であった叔父の養子となって吉田家を継ぎ、また、叔父の玉木文之進から『孟子』を学ぶ。厳しい教えを受けていた松陰は、13歳の時に藩主の御前で山鹿素行の『武教全書』を講義している。さらに21歳の時には九州に遊学して長崎で海外事情を見聞しており、すでに相当の学問を積んでいる。その松陰が水戸学にふれて日本の本質に眼を向け、日本人としての自覚を促されるわけであるから、義公以来の水戸の学問がどのようなものであったかをうかがい知ることができる。

その後、松陰は25歳の時に神奈川・下田でアメリカ軍艦に乗り込むが、渡航を拒否され自首し、萩に護送され、野山獄に入れられる。その入牢中の26歳の時に、従弟の玉木穀甫の15歳元服に際し、有名な『士規七則』を書き贈っている。7つの規則を掲げこれらを身につけて、はじめて「人と成る」ことができるという。

まず、「およそ生れて人となる、よろしく人の禽獣に異なる所以を知るべし」、その次に、「およそ皇国に生れては、よろしく吾が宇内に尊き所以を知るべし。けだし皇朝は万葉一統にして、邦国の士夫、世々禄位を継ぎ、人君は民を養ひて、以て祖業を続ぎたまふ。臣民は君に忠にして、以て父の志を継ぐ。君臣一体、忠孝一致、ただ吾が国を然りとなす」とある（この「皇国」という言葉に松陰はまさしく命をかけたといっても過言ではない）。

戦後の学校教育においては、人の人たる所以、人間として踏むべき道、日本の正しい歴史・伝統文化については、ほとんど学ぶことがなかった。われわれが受けた学校教育は、「人も動物である」と、ホモ・サピエンスとして生物界の動物的面ばかりを強調された教育の中で育ってきた。動物的な本能のままに振舞うことが良いこととされ、それが人間性、個性であるかのように

いわれ、一時期は、フリーセックスさえもてはやされ、禁欲や自制は時代遅れで、さげすまれる風潮すらあった。したがって、人倫や人間の尊厳、国家の尊厳は、家庭や地域など学校教育以外の社会教育の場で学ぶはかなかった。また、歴史や伝統文化についても、占領政策や唯物史観の影響がずっと尾を引き、学校教育においては自国を卑下したり悪しざまにののしったりする自虐的教育、自国は愛するに足らぬ国と教えられ、スイスやソ連、中共を憧れるような教育を受けてきたのである。

日本教職員組合（日教組）による国籍不明の教育が猛威を振り、学校現場では国旗「日の丸」は引きずり降ろされ、国歌「君が代」斉唱が拒否される教育界にあって、その補完教育の場として、青年の家や少年自然の家を建設し、社会教育の場で「日本人教育」を進めようと、先輩たちは懸命の努力をしてきた。同時に学校現場においても、志のある教師たちが教育正常化の火を燃やし続けてきたのであった。

こうした努力が実を結び、戦後60数年を経て、ようやく教育基本法が改正され、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」を目的とする教育が、遅きに失したとはいえ復活しつつある。

「汝自身を知れ」とはデルフォイのアポロンの神殿の入口に刻まれた古代ギリシアの格言である。わが国の歴史と伝統文化を知ることが、自分の拠り所、立ち位置を知ることにはほかならない。

## 2. 歴史や先賢に対する不遜な態度

日本の歴史や伝統文化を考える際、われわれが常にかんじておかねばならないことは、学問が浅薄にならないことである。山崎闇斎門下で土佐南学派を再興した谷秦山（1663～1718）は、栗山潜鋒の保健大記を講じた時、その開講の辞で次のように述べている。

「吾も人も日本の人にて道に志あるからは、日本の神道を主にすべし。その上に器量・気根もあらば、西土の聖賢の書を読んで羽翼にするぞならば、上もないよき学なるべし。これ舍人親王の御本意、恐れながら吾等内々の志なり。然るに今の神道者は西土の書にうとく文盲なり。儒者は人の国をひいきにし、吾国の道を異端のやうに心得てそしり、各異をたてて湊合根著せず、

学風が薄く<sup>みだ</sup>猥りにして見るに足らぬぞ。吾これを憂ひ、  
内々同志と講習して天下の学風の助にもなる様にした  
いと思へども、(中略)その外名<sup>ほか</sup>ある学者たち、多くは  
斉国魯国のせんさくを第一にして、吾国に懇切なる志  
なく、又は神道を尊敬はせられるれども、未伝授<sup>みでんじゆ</sup>なり。其  
外は詩文の浮華にして、どれこそ取に足らぬぞ。」(「保  
健大記打聞」『日本学叢書第十二卷』所収)

谷秦山が指摘するように、日本のことを学んだだけ  
で、世界のことがわかるわけではない。過去の歴史を  
学んだだけで、現代の問題が解けるわけではない。論  
語の為政編に「故きを温ねて、新しきを知れば、以て師  
たるべし」とある。現代の諸問題を考え、それに取り  
組むには、外国のことも学習し、現代の諸問題も考察し  
なければならない。「時務を知るは俊傑にあり」(『十八  
史略』)といわれるから、それは容易なことではないが、  
われわれは、そこまでも内外古今の叡智や知識から学  
習する謙虚さを失ってはならない。また、いかに日本  
に優れたところがあるにしても、外国にも勿論いろい  
ろと優れたところがある。採長補短のため、たえず古  
今東西に目をくばって勉強しなければならない。しか  
し、自国の文化を外国のこと以上に知っていなければ  
ならないことは当然である。

谷秦山をことのほか顕彰した平泉澄博士は、昭和7  
年に出版した『国史学の骨髓』の巻頭に「一の精神を  
欠く」という題名の論文を掲げている。

この論文は、昭和3年12月に執筆された。当時の  
わが国は、すでに満州事変に突入し、困難な国際関係の  
もとにありながら、国内では思想的にマルクス主義・  
共産主義、大正時代以降のデモクラシーと、これに反発  
する国家主義者等の対立論争が熾烈であった。当時の  
日本、特にその教育界に最も欠落しているものとして、  
同博士は先賢に対する尊敬心を強く指摘している。

そこでは、まず歴史教育について、「日本の歴史こそ、  
我々日本人をして、真に日本人たらしむるもの、真に人  
格たらしむるものであり、従つて歴史こそ、教育の中心  
をなし、核心をなすものである。しかるに従来の国史  
教育は、この重大なる任務をになふに、甚だしい欠陥を  
もつてゐる。それは政治上の出来事を雑然とならべ立  
てて、僅かな文化事象を、ほんの申訳に、又まことにだ  
しぬけに、所々にさしこんだものに過ぎない。極古い  
政治史の年表的ぬきがきに、所謂文化史の様式をまね  
て形ばかりの化粧を施したやうなものである。かやう

な蕪雑なものでは、日本の歴史が分る筈はない。かや  
うな国史教育を受ければ、誰しも日本の歴史をしみじ  
みと味ひ、深い意味をその中に発見し、自分の本当の姿  
をそこに見出してゆく代りに、むしろ之を軽く見、あつ  
さりと見過ごすやうになるのである。」

「国史の教育は、大いに改めねばならない。単なる年  
表的抜書を改めて、文化の開展、国民生活の發展、国民  
思想の進展を明かにし、時代々々の相違をはつきりと  
描写すると共に、それにも拘らず、国史三千年を貫いて  
流れる所の精神を感得せしめねばならない。若し斯く  
の如くにして歴史のうちに己が真の姿を見出し、歴史  
のうちに己が使命を悟り、歴史のうちに人生の帰趨を  
求め得ないならば、歴史教育は畢竟無用の長物に過ぎ  
ないであらう。単なる年号や人名の暗記が、このあわ  
たらしい人生に何の必要があらう。歴史の教育を見る  
に、色々の趣向が凝らされ、色々の考案がめぐらされて  
ゐる。教授の技法は随分進んでゐる。而して一の精神  
が欠けてゐる。」

そして、「殊に遺憾に思ふことは、先賢に対する尊敬  
の欠如である。これは、歴史を真に理解せず、先人の思  
想や業績の意義を悟れない為であらうが、逆にいへば  
その傲慢不遜の態度が、先賢の心を得ざる所以であら  
う。教師が先賢に対する態度も傲慢であれば、生徒が  
先賢に対する態度も不遜である。否、現に生徒が教師  
に対する態度が甚だ失礼である。この師に対する倨傲  
無礼の態度こそ、日本の歴史に矛盾し背反するもので  
ある。道を求める熱烈なる心、賢を賢として色に易ふる心、  
長者に敬して仕ふる心、この心、今の教育界に甚だ稀で  
ある。」として、道元禅師の『正法眼蔵』を引きながら、  
「道を重んじ身を軽んじ、得道の人を礼拝して法を尋ぬ  
る至誠、これが先賢の態度であつた」と説き、「この心、  
今の世に於いて殆んど稀である。呪われたる哉、求道  
の至誠なき教育界！ ひとり国史教育といはず、教育  
界のすべてにわたつて、技巧いよいよ進んで、而して一  
の精神を欠いてゐる。」と断じ、国の行く末を憂っている。

### 3. 古典や言葉の継承の重要性

古典にしてもそうだが、伝えていかないと、その言葉  
自体が死語になってしまう。

大学生に、太田道灌を知っているか聞いたところ、  
誰ひとりとして知らなかった。そうすると、太田道灌  
と山吹の里伝説の背景にある「七重八重花は咲けど

も山吹の実の一つだになきぞ悲しき」の古歌など色あせてしまう。

『枕の草子』に出てくる清少納言と中宮定子のやりとり、「雪のいと高う降りたるを例ならず御格子まゐりて炭櫃に火おこして物語などして集りさぶらふに『少納言よ 香炉峰の雪いかならむ』と仰せらるれば御格子上げさせて御簾を高く上げたれば 笑はせ給ふ。」の背景にある白居易の「香炉峰下 新たに山居をとし 草堂初めて成り 偶たま東壁に題す」という次の詩（原漢文）を知らなければ、全く説明に窮する。

日高く睡り足れるも猶お起くるに慵く  
小閣に衾を重ねて寒さを恐れず  
遺愛寺の鐘は枕を敬そばだてて聴き  
香炉峰の雪は簾を撥<sup>かか</sup>げて看る  
匡廬<sup>きやうろ</sup>は便ち是れ名を逃る<sup>な</sup>の地  
司馬は仍<sup>や</sup>お老いを送るの官<sup>やす</sup>為り  
心泰く身寧らかなるは是れ帰する処  
故郷何ぞ独り長安にのみ在らんや

よい言葉を知っていないと実感、感動も薄っぺらなものになってしまうのである。

これも、その一例であるが、筆者は、平成22年11月18日、宮崎市高岡にある宮崎市立<sup>むくさ</sup>穆佐小学校を訪れた。「穆」とは稲穂が垂れている象形文字である。この学校が高木兼寛（嘉永2年～大正9年）の母校だったことを訪問して知った。高木兼寛は海軍軍人、医学者、男爵、東京慈恵医科大学の創設者。脚気の撲滅に尽力し、「ビタミンの父」として有名である。医学博士の第1号で、南極大陸に「高木岬」と個人の名前がつけられた第1号でもある。

校長室には、高木博士の書と若い頃の写真、そして5年生が作詞した「<sup>ぼくえん</sup>穆園先生の歌」が掲げられていた。穆園は高木博士の号。郷土の偉人に学ぶ「穆園学習」は地域ぐるみで続いているそう。また、東京慈恵医科大学は、創設者の母校の児童2人を毎年東京に招く事業を20年も続けているという。

校門を入ったところには高木博士の銅像が立っており、台座には「兼寛先生遺詠」として、「茸狩にいでたつ児等がいさましき こゑきく朝のここちよきかな」の歌が彫りこまれていた。

玄関には高木博士が「地霊人傑」と墨した書の複写が飾ってあった。学校や地域では、この文字の出典がわからないということだったが、筆者にはピンときた。

筆者が愛誦する吟題のひとつに乃木希典「富嶽」がある。この詩は、雄大な霊峰富士は、土地も霊妙、人物も傑出しているわが国・神州をよく象徴しているとの信念を詠じている作者晩年の作。この漢詩を書き下すと次のとおりで、その結句に「地霊人傑」の4文字が出てくる。

富 嶽 乃木希典  
峴<sup>りやうそう</sup>嶺<sup>ふがく</sup>たる富嶽千秋に聳<sup>そび</sup>ゆ  
赫<sup>かくしやく</sup>灼<sup>ちやうき</sup>たる朝暉八州を照らす  
説<sup>や</sup>くを休めよ<sup>くく</sup>風物<sup>くく</sup>の美  
地<sup>ち</sup>霊<sup>れい</sup>人<sup>じん</sup>傑<sup>けつ</sup>是<sup>これ</sup>神州

大意は、霊峰富士は、まことに気高く雄々しく、千年万年の昔から今も変わらぬ姿でそびえている。この峰から昇る朝日はあかあかと国中を隈なく照らしている。実に、この山は日本の象徴である。あれこれと細かく、諸々の風景などを述べ立てることはいらない。国土は新たな傑出した人物に富む。これこそ、わが国が神国たるゆえんである。

さらに調べていくと、「地霊人傑」は水戸の藤田東湖の『弘道館記述義』の中に「夫日出之郷、陽氣所發、地霊人傑、食饒兵足」という文章があった。『弘道館記述義』は明治の有識者は誰でも読んだ書物である。したがって、乃木大将も高木博士も「地霊人傑」の言葉をここから採られたものとみて間違いはなからう。

ちなみに、『日本国語大辞典』には次のように記している。

ちれい - じんけつ【地霊人傑】〔名〕その土地柄やそこに住む人々がすぐれていること。＊艸山集〔1674〕二一・宇治懷旧「地霊人傑旧風物、事往跡非愴<sup>〴〵</sup>石泉<sup>〴〵</sup>」＊弘道館記述義〔1852〕上「夫日出之郷、陽氣所<sup>レ</sup>發、地霊人傑、食饒兵足」

伝承が途絶えると、わずか1世紀前の先人の座右銘や最も好んだ言葉すらわからなくなってしまう。

ここで詩吟や漢詩を取り上げたが、いま、漢文や漢詩の教育は、古文以上におろそかになってはいないだろうか。これでは、漢文、儒学を中心にしてきた近代までのわが国の学問・文化が理解できなくなってしまう。詩吟の人口も減る一方で、各流派は衰退の一途をたどっている。なにしろ、若い人が見向きもしないのが昨今である。とはいえ、先般、筆者が授業で詩吟を吟じたら、学生はかなり興味を示した。好き嫌いの前に、接する機会がないからかもしれないが、ここに文化の断絶を見る思いがしてまことに淋しい限りである。



かつては、漢詩を吟じることは、教養のある武士のたしなみであった。

#### 4. 先哲遺文講義の打聞から

吉田松陰が書いた『偶記』という短文がある。

この文章に筆者が会ったのは、昭和45年11月28日に東京・赤坂の乃木会館で開かれた国史研究会（田中卓博士主宰）で同博士が吉田松陰「象山先生に与ふる書」とともに講義された時である。この日の例会は、3日前の25日にあった重大な事件に関連して急遽開かれたもので、多くの学生・青年が参加した。筆者は同研究会の事務局を務めており、当日の先哲遺文講義を記録し打聞として残していた。

##### (1) 吉田松陰『偶記』との出会い

偶記 二日

獄外街上、夜毎に謳歌放喙して過ぐる者あり、往々其の何の詞何の語たるを審らかにし難し、四月二日夜初更、余獄燈をもて書を観る、偶人有り、菅茶山の楠公の詩を誦し、遠くよりして至る、余耳を傾けて其の数句を認む、已して稍遠く稍微かに、遂に滅して聞くべからざるなり、未だ久しからずして復旋り、方孝友絶命の詩及び文山零丁洋の詩末の句を誦し、然る後はすなはち去れり、声甚だ清亮ならずと雖も、音吐頗る洪、輕佻の態少なし、蓋し奇男子なり、嗚呼、学者孰れか文山孝友を敬する知らざらん、言或ひは楠公に及べば、田父野老と雖も必ず色を莊みて竦聴す、天良く此の如し、而して世終に人物無し、蓋し愚にして学を知らざること、学ぶと雖も実ならざると然るを致すのみ、空谷の足音、猶ほ或ひは喜ぶべし、況や詩の声、機に触れて発動するおや、吾れ出でて之と言はんと欲す、而して得べからず、之を記して人間に伝へ、以て其の人を物色するなり。（原漢文）

田中博士は、「おそらく、こういう漢文に接することは初めてという人が多いと思う。書き下しで示したので、こういう読み方をするのかと思われる方が大部分だろうと思う。しかし、読み方はわかったが、意味がわからないというのが大方だろうと思う。しかし、これから解釈をしていけばわかるであろう。つまり、現在の学生は学問未熟、この点をはっきり自覚する必要がある。自分は大学生で何でも知っていると思われては大変な間違いである。100年前に書かれた吉田松陰と

いう、日本の最も優れた方の文章が素直にわからないということであれば、決してみなさんの学問というものとは完全なものではない。未熟なのである。お互いに未熟だということを自覚することが、学問をする上に最も大切なこと。謙虚な気持ちで一緒に勉強したいと思う。」と前置きし、字句を追って解釈された。

##### (2) 謙虚な気持ちで逐条解釈

○偶記 二日

偶記とあり、その下に2日とあるが、これは安政6年4月2日。安政6年というと松陰先生が殺された年である。その年の秋に殺されたので、松陰先生没する半年前。松陰先生が亡くなるのは10月27日で、江戸の伝馬町の獄中で死刑に処せられる。その首は小塚原に捨てられる。その半年前が4月2日である。

○獄外街上、夜毎に謳歌放喙して過ぐる者あり、牢屋の外の通りを毎晩歌をうたって通る者がある。

（獄外というのは、当時、松陰は今の山口県の萩の獄中にいた。謳歌は歌をうたうこと。放喙の喙というのは吟と同じ。）

○往々其の何の詞何の語たるを審らかにし難し、しかし、何をうたっているのか明瞭ではない。

○四月二日夜初更、余獄燈をもて書を観る、偶人有り、菅茶山の楠公の詩を誦し、遠くよりして至る、

しかし、4月2日の初更、私は牢屋のかすかな燈で書物を読んでいると、ちょうど人が菅茶山の楠公をほめたたえた詩をうたって、遠方よりやってきた。

（初更というのは、夜を5つに分けて、その一番初めの方が初更。ふつう戌の刻という。午後7時から9時までがそれにあたる。菅茶山は江戸時代の有名な儒学者で詩人でもある。その菅茶山が楠公をほめたたえた詩はどのような詩であるかは書かれていない。その詩は明らかではないが、菅茶山が楠公をうたった最も有名な詩といえば、「千歳恩讐両つながら存せず、風雲長へに為に忠魂を弔ふ、客窓一夜松籟を聴く、月は暗し楠公墓畔の村」（原漢文）という詩で、『生田に宿す』という題がついている。生田というのは楠公が討死されたところで、今の神戸市生田区にあたる。今は繁華などころだが、昔は非常にさみしいところであった。）

○余耳を傾けて其の数句を認む、已して稍遠く稍微かに、遂に滅して聞くべからざるなり、

私は書物を読むのをやめて、これを聞き、その数句を認識することができた。そうしていると、だんだん遠

くなって行き、ついに声も消えていって、聞くこともできなくなってしまった。

○未だ久しからずして復旋<sup>またかへ</sup>り、方孝友絶命の詩及び文山零丁<sup>れいていよう</sup>洋の詩末<sup>すえ</sup>の句を誦し、然る後はすなはち去れり、

ところが、あまり経たないうちに、その人はまた帰ってきて、今度は、方孝友の絶命の詩と文山零丁洋の詩の終わりの2句をうたい、そして行ってしまった。

（方孝友という人は、有名な明の忠臣・方孝孺の弟。この人は、反乱が起こり皇帝が都を捨てた時、方孝孺は節を屈せず、遂に殺されるに至ったのであるが、その時、親族もことごとく誅戮に遭った。弟の方孝友が殺されようとする時、兄の方孝孺が、覚え涙を流す。その時に、弟の方孝友が兄の方孝孺に対して次の詩（原漢文）を詠んだ。

阿兄何ぞ必ず涙潸潸<sup>あけい さんさん</sup>

義を取り仁を成すは此の間に在り

華表柱頭千載の後<sup>かひよう</sup>

旅魂<sup>きゆう</sup>舊<sup>よ</sup>に依りて家山に到らん

（非常に果敢な勇ましい詩である。「兄さん、どうして涙を流されるのであるか。われわれが仁義につくというのは、まさにかかる時にあるのではないか。今こそわれわれは道義につくべきである。今はこのような苛酷な処刑にあうけれども、われわれの魂は郷里の祖先のお墓に集まることであろう。」—こういう詩である。）

（文山というのは、有名な文天祥のこと。文天祥の「零丁洋を過ぐ」の詩も有名であるが、ここでは長いので全部を掲げるのはやめて、一番初めと一番終わりを書いておくことにする。一番初めは、

辛苦遭逢<sup>そうほう</sup>一径より起こる

実にいい言葉、われわれの愛誦すべき言葉である。

途中を省略して、最後の2句だけをとると、

人生古より誰か死無からむ

丹心を留取して汗青を照らさむ

最後の2句とあるから、これを詠んだのであろう。

一番はじめの「辛苦に遭逢するは一径より起こる」とは、いろいろ困難な立場、あるいはつらい立場に逢うということは、一径より起こる、すなわち、真に正しい学問を学んだからこそ、そういうつらい目にあうのだということ。学問をしなくて、呑気に暮らしていたら、レジャーだのバカンスだのといって、みな勝手なこと

をやれるだろう。しかし、何が真実であるか、道義・道徳を学んだ時、はじめてその人はつらい目にあう。このようなつらい目にあうのは、学問をしたからだということ詠んでいる。これはまさにその通りで、呑気に考えておれば少しも苦勞をする必要はない。本当の辛苦というものは、学問をすることによって起こってくる。最後の「汗青を照らさむ」の「汗青」は歴史の意味。この「零丁洋を過ぐ」の詩は、文天祥の数多くの詩の中で「正気の歌」とともに非常に見事なものであり、古来、人の胸を打つものである。自分がこのような苦しみにあうのは、もともと学問をしたところによる。もし学問をしなかったならば、このような苦勞はしなかったであろう。しかし、道の何たるかを知った以上は、自分はどこまでも道にそって進まねばならない。こういう内容である。）

○声甚だ清亮ならずと雖も、音吐<sup>おん</sup>頗る洪<sup>とすこぶ</sup>、輕佻<sup>おほし</sup>の態少し、蓋<sup>けだ</sup>し奇男子なり、

その人の声は非常に清んでいるというわけではないが、その声はすこぶる大きくて、軽々しいところがない。よくよく考えてみると、これは一風変わった人物であろう。珍しい人物といわなければならない。

○嗚呼、学者孰<sup>た</sup>れか文山孝友を敬する知らざらん、

ああ、学問をした人物で、文天祥といい、方孝友といえ、尊敬しないものがあるろうか。学問をした人であるならば、誰でも知っている。

○言或ひは楠公に及べば、田父野老と雖も必ず色をつつし<sup>しやうちよう</sup>みて竦聴<sup>かく</sup>す、天良く此の如し、

話が楠公のことに及べば、学問をしたことのないような農夫でも、必ず厳肅な気持ちでこれを聞く。つつしみ畏れてその話を承るのである。人々はよくわかっている。すなわち、人は自然と、道義・道徳を尊重するものである。人の性は善なりというが、人の性は自然、道徳を尊重するものである。

○而して世終に人物無し、

ところが、世の中を見てみると、ついに人物がおらない。人の性は善といい、無学の者も楠公の話を聞くときは、色をつつしんで聞くにもかかわらず、人物がいけない。その原因はどこにあるのか。

○蓋し愚にして学を知らざること、学ぶと雖も実ならざると然るを致すのみ、

なぜ人物がいけないかというと、一つは愚かであって学問をしないからである。生まれつきはよくても、性

は善であっても、学問をしなかったら人物にはならない。もう一つは、学問をするにはしても実がない。空しいからである。学問をしたものの、それが一つの抽象的な物の考え方にすぎず、実際に内容が充実しておらない。現実学問を生かしてくることがない。そういう二つの理由によって、世の中に人物がないのである。

○空谷の足音、猶ほ或ひは喜ぶべし、況や詩の声、  
人物が全くおらない時に、足音を聞くのさえ喜ばしいことであるのに、まして、いま聞くとおころの詩の声は、  
菅茶山の楠公の詩であり、方孝友、文天祥の詩である。

○機に触れて発動するおや、吾れ出でて之<sup>これ</sup>と言はん  
と欲す、

これは実に意味深いことである。人のいない牢獄で足音を聞くのみではない。この詩の深い意味を聞くと、飛び出して行って、その人と話をしたい念にかられる。

○而して得べからず、  
しかし、私は牢屋にしばられていて、出て話をする  
ことができない。

○之<sup>これ</sup>を記して人間に伝へ、以て其<sup>じんかん</sup>の人を物色するなり。  
そこで、これを記録して世間に伝え、その人物を探  
したいと思うのである。

### (3) 幕末の風潮と今日

字句の解釈のあと、「『偶記』についてわれわれが感  
ずべき点」を田中博士は以下のように説いた。

くまず、安政6年という時点において、人々がどうい  
う詩を好んでうたっていたかということをこれによっ  
て察することができる。

ここであげられているのは、楠公の詩、絶命の詩、零  
丁洋の詩で、いずれもいわば忠義の人の肺肝を吐露し  
てできた詩である。そうでなければ、忠義、忠節を敬慕  
してつくられた詩である。ここにこの当時の日本のひ  
とつの風潮を察することができる。幕末というものの  
中に、こういうひとつの風潮があったということをお  
われわれは承知しておかなければならない。もちろん、  
いろいろな残念なことも多かった。しかし、楠公を慕い、  
方孝友を慕い、文天祥を尊敬する、そういう雰囲気があ  
ったということを注意しておく必要がある。それに  
比べて今日の日本はどうであるか。それは歌をひとつ  
見ればわかる。今、どのような歌がうたわれているか。  
それと幕末という情勢の中で好まれた歌というものと  
を比較しておいてほしいと思う。

次に、われわれ自身が反省して注意すべきことは、「蓋

し愚にして学を知らざること、学ぶと雖も実ならざると  
然るを致すのみ」というところ。これを世間一般の  
問題としてではなしに、われわれ自身の問題として、お  
互いに反省し、深刻に考えなければならない。人の性  
は善なりという。それにもかかわらず、どうして楠公  
が今出ないのであるか、あるいは方孝友、文天祥のごと  
き人物が出ないのであるか、といえ、愚にして学を  
知らない。世間一般の人々は、ただ自分の利害得失だけ  
を考えて、小利口な人物は多く出ている。しかし、われ  
われは、そういう世間の小智小才というものを問題に  
するのではない。小智小才の人々は、学問がどれほど  
大切なものかを知らないで、極めて浅薄に判断する。  
自分の小智小才でもって解釈する。学問は自分の智恵  
で適当に使用すべきものだと考える者が多い。いづく  
んぞ知らん。学問というものは、われわれが一切の  
ものをそれによって正当に判断することを得しめる物差  
しである。決して私見で考えるごときものではないの  
である。〉

### (4) 学ぶといえども実ならず

〈「学ぶと雖も実ならざること」。これはわれわれにと  
つての痛切な反省でなければならない。先哲について学  
ぶといえども実ならず、そういうことではないだろ  
うか。先哲によって、学問がいかに深いものであり、い  
かに欠くべからざるものであるかということは知って  
いても、単に幾何の公式のようなもの、あるいはお題目  
のようなもので、実際に応用されないということであ  
ったならば、学ぶといえども実ならず、ということである。

われわれは、先哲によって目標を与えられている。  
目標を与えられている場合には、われわれ自ら歩むと  
いうことが必要で、そこに到達する努力をしなければ  
ならない。ただ単に目標だけ与えられて、そして満足  
しているということであってはならない。上の「愚に  
して学を知らず」というのは、目標を知らないとい  
うことで、下の「学ぶと雖も実ならざること」というのは、  
目標は明確に知っているが、これは人から与えられた  
ものであって、自分でそれに到達しえないものである。  
この点はわれわれ自身が深く考えなければならないこ  
とである。ことに今日のような情勢においては、この  
点をお互いに深く考えなければならないと思う。

そして、松陰先生は獄中にあっても、こういう優れた  
人物の動きに注意して、わざわざこれを記録して、人物  
を得て道を弘めようとしている。われわれも同志同学



を見つけて道を弘めていくということが大事なことである。ただ、自分だけがよければよいというものではない。松陰先生のごとく優れた人物でも、自分で出て行って会えないけれども、文章に記して、世間にこれを知らせて、その人物を求めたいということを考えている。われわれもそれに学ぶところがなければならない。〉

今は録音機器が発達しているが、昔から師の講義は細大漏らさず、一心不乱に筆記して打聞を残したものである。

## 5. 師承の学―師道をあなどるなかれ

筆者は学生時代、寮生活を送っていた時、朝拝の時に吉田松陰の『赤川淡水の常陸に遊学するを送るの序』を皆と唱和した。漢文を書き下して紹介する。

「古昔盛時の学たる、上は治教経芸の大より、下は歌章音楽の小に至るまで、師承する所あらざるはなし。是を以て能く其の旧を存し、其の故を守りて失はざるなり。鎌倉室町を歴て、逆乱相尋ぎ、名教尽くし、授受の義、徒らに之を曲学小数に寓すれども、而も亦た未だ嘗て失墜せざるなり。徳川氏興りて、師道稍や盛んに、學術日に闢け、英才輩出す。而るに近日、読書稽古の士、先輩を軽んじ、師儒を慢ること、天下皆な是なり。而して吾が藩、特に甚し。是にして止まらずんば、吾は恐る、師道地を掃ひ、名教由つて存するなからんことを。是れ固より宏才篤学の士の、起つて之を振ふに待つあるなり。吾が友赤川淡水は、齒富み才足り、志高く気旺なり。蓋し後進の袖領なり。傾ろ將に東のかた常陸に遊び、師を求めて之に従はん。夫れ常陸の学は、天下の推す所にして、其の老輩碩師は、皆な師承する所あり。今ま淡水遠く往きて之に従ふは、固より以て其の学の蘊を尽さんと欲すればなり。嗚呼、淡水、師道を慢ること勿れ、私見を立つること勿れ。取捨去就、唯だ先生に是れ聴かば、則ち古道及び難からざるなり。吾、小少より好みて書を読み文を作ると雖も、未だ師承する所あらずして、自ら焉れを疑ふ。淡水、往きて師として之に事ふことを得ば、亦た幸ひに斯の言を以て、之を質せ。」

吉田松陰は、嘉永4年12月から翌年にかけて、東北遊学の途上、水戸を訪れ、特に会沢正志斎から多大な感化を受けた。その時の様子を日記に「水府の風、他邦

の人に接する款待甚だ渥く、歓然として欣びを交へ、心胸を吐露して隠匿する所なし。」と記している。この時、水戸遊学で学んだところを、後輩の赤川淡水の常陸に遊学するに際して饒の言葉としておくったのが、この「師道を慢ること勿れ。私見を立つること勿れ。」というものであった。この言葉に水戸学の特徴が表れていると思う。

## 6. 伝統文化を護り伝える人間教育を

筆者は、昭和から平成に時代が変わる頃、関西の志のある幾人かの教育者を訪ね、「教育の燈火―教育を聞く」という連載記事の取材を行ったことがある。そのとき、兵庫県出石に、元小学校長で浄土真宗のお寺の住職の東井義雄氏を訪問、教育実践のあり方について、具体例を中心に聞いた。東井氏の実践論は名著『村を育てる学力』に集約されているが、残念ながら、高度経済成長期以来このかた、学力といえば皮肉にも「村を捨てる学力」になってしまっているように思えてならない。

確かに、「学校・家庭・地域社会との連携」「地域に根ざす教育」といったスローガンは数十年来、教育界で繰り返されたが、掛け声倒れ、画に描いた餅になってしまった。教育界の外野席に身を置いたときから感じていたことだが、戦後の教育界ほど、実態の伴わない「美辞麗句」の横行するところはない。いずれにしても、これからの学力の基本は、読み・書き・算（情報処理・分析能力を含む）を根底にすえた「ムラ・地域を育てる学力」でなければならないと思う。

久しく家庭の教育力、地域の教育力の低下が叫ばれている。だからこそ、家庭・地域・学校の三者が連携していけば、なんとかこの危機は救えると思う。ただし、「教育は国家百年の大計」であり、時間はかかるだろう。一時期、問題はさらに深刻化するに違いない。日教組の偏向教育の害毒はなかなか消えることはない。親に放棄され、教師に見放された子どもたちが、いまや第2世代、第3世代となって子育てをしている状況にあるから深刻さはある。

主権回復61年目。いまだに日本の歴史・伝統は軽視され、道義は地に堕ちたままである。物事の判断基準は狂ってしまって久しい。絶対的価値とされてきた愛国心、郷土愛、敬神・崇祖の心、親子愛、夫婦愛、師弟愛などは崩壊の危機に瀕している。しかしながら、昔ながらの手振り、美風・淳風を残し伝えようとしてい



る地域も少なくない。

地域に息づく信仰心、緑なす森や清き水、鎮守の森におりなす神と自然と人々との共生、ムラを育てようとする教育の営み等々、「山路来て何やらゆかしすみれ草」(芭蕉)の世界がそこにはうかがえる。

吉田松陰の『講孟箚記』に「故家・遺俗・流風・善政」という項がある。松陰はこれを講じて、「そもそも国の治安長久なるは、地広きにもあらず、民衆きにも在らず。惟頼みとすべきものは此の四者にしくはなし。然れば政を為す者ここに心を用ひずんばあるべからず。是を知らずして妄りに祖宗の成法を変じ、国家の美俗を易ゆる者は、国賊と言ふべし。」という。

国を憂いて平素から力を鍛える家族や組織があるだろうか。古くからの伝統や慣習は護り伝えられているだろうか。社会の上に立つ者に下は従うというが、上に立つ者は人々の規範となっているだろうか。善政は布かれているだろうか。

元気みなぎる地域に、人々の純朴な気風、息吹に接するとき、地域興し・ムラ興しこそ国家再興の基盤だとしみじみと思う。楠公を生んだのも河内の地域、菊池氏を育んだのも筑紫の地域、バックグラウンド、拠点は地域にあった。

天地の間に立とうと思えば、地に足がついていなければならない。議論も地についていないと空理・空論になり、高邁な理論も、実践に裏打ちされたものでないと意味がない。いま、身体を動かすこと、額に汗して働くことを嫌う風潮があるが、道德教育の基本は身体を動かすことから始まるといってよい。知行合一、生涯学習の理念も、為すことによって学ぶ、学びを実践に移すことであるといわれるが、このことは、まさに吉田松陰の教え「義は勇によりて行われ、義は勇によりて長ず」(『士規七則』)にほかならない。

それぞれが一隅を照らす精進が、地域を興す力となり、それが国を興す力になっていく。われわれの父祖は、そのようにして歴史を歩み、伝統文化を継承し、開展してきたのである。われわれ自身の中に脈々と流れる歴史を呼吸し、実感する伝統文化教育こそ、「人間教育」を培うものでなければならない。

国民教育の中心となるものは伝統文化の教育であり、さらにその骨髄となるものは歴史でなければならない。歴史こそは国民教育の中核である。その歴史は、自国

の歴史であることはいうまでもない。敗戦後、占領軍が日本弱体化政策により、国史教育、修身教育、伝統文化を尊ぶ教育を排したのもそのためである。人和其他の動物とを分かつ原理を一言でいえば人格であり、人が人たるは人格による。歴史は自由の人格が永久にわたる創造的開眼の世界である。教育もしかり。したがって、「人間教育」は自由なる人格を創造するものでなければならない。われわれは教育の客体に人格を要求するのではなく、教育の主体に人格を要求する。これこそが伝統文化教育に期待するところであり、その教育の中核は先哲に学ぶものでなければならない。道を重んじ、得道の人を礼拝して法を尋ねる至誠、これが先哲の学問に対する態度であった。伝統文化教育が求道の心を取り戻すことになることを冀う。

#### 引用・参考文献

- 1) 平泉澄『国史学の骨髄』至文堂 1932
- 2) 平泉澄『先哲を仰ぐ』(愛蔵版) 錦正社 1998
- 3) 谷泰山『保健大記打聞』(日本学叢書) 雄山閣 1940
- 4) 近藤啓吾『崎門三先生の学問』皇学館大学出版部 2006
- 5) 会沢安『新論・迪彝篇』岩波書店 1931
- 6) 山口県教育会編『吉田松陰全集』(普及版) 岩波書店 1940
- 7) 山鹿素行・吉田松陰『武教本論・武教小学・武教全書講録』(日本学叢書) 雄山閣 1938
- 8) 清少納言『枕草子』(新日本古典文学大系) 岩波書店 1991
- 9) 田中卓『維新の歌』日本教文社 1974
- 10) 東井義雄『村を育てる学力』明治図書 1957
- 11) 榊原帰逸『詩吟道大鑑』金園社 1999
- 12) 梶田叡一『和魂ルネッサンス』あすとろ出版 2009